安田女子大学紀要　37，1−11　2009.

敬語体系における相似的階層構造

川　岸　克　己

The Similar and Hierarchical Structure of the Japanese Honorific System

Katsumi KAWAGISHI

1.　は　じ　め　に

本論は，現代日本語における敬語の体系の構造について考察する。現在，日本語のさまざまな文法体系に階層的かつ相似的な構造を見出し，その探究を続けている。ここで対象とする敬語体系もまた，他の日本語のそれぞれの語彙体系や文法体系と同じように，階層的かつ相似的な構造を構築することが認められた。本論は，この構造について説明することをその目的とする。

2.　背 景 と 目 的

2-1.　背　　景

敬語の体系について考察するきっかけはふたつある。

ひとつは，今述べた筆者がいくつかの論文で継続的に探究している〈自己非自己構造〉が文法体系を構築する敬語にも存在するのではないかという推測に端を発している。これまで，古典語あるいは現代語にかかわらず，助詞や助動詞，あるいは指示詞体系などに，階層的かつ相似的な自己非自己構造があることを発見し，論じてきた。まだまだ不十分ではあるが，この自己非自己構造を簡単に定義するなら「表層的な文法的意義を生じさせる前段階の，より原初的なロジックによって発生する分節意味基準によって構築された構造」となる。これはそれぞれの文法体系を形成する表層的な分節基準とは別に存在する，いわば深層的な分節基準といえる。

たとえば，現代日本語の助詞「は」と「が」は，ともに助詞として一文の中で同じような文法的位置で使用され，「主題」あるいは「主語」を意味する。文法的にも意味的にも近似的な「は」と「が」であるが，「は」は疑問詞を上接させず，上接する語句を既知情報とするのに対し，「が」は疑問詞を上接させ，上接する語句を未知情報とする，という違いがある。また，古代日本語の助動詞「つ」と「ぬ」においては，ともに助動詞であり，「完了」を意味するが，前者は上接する語句（動詞）が人為作為的なものであるのに対して，後者は上接する語句（動詞）が自然推移的なものであるという違いを有する。

これらの違いは，表層的な意味とは別に存在する深層の意味であり，それを一般化すると「自己領域に関するもの」＝「自己」と「自己領域以外（他者領域）に関するもの」＝「非自己」という分節基準の下に構造化されていることが分かった。この「自己」と「非自己」とに分節する構造がどうやら敬語の体系にも存在するのではないか，しかも，現代日本語の敬語体系は，この

構造によってより階層化が進行しているのではないかと思われた。この構造の存在について敬語体系を視点として考察を深めたいと考えたのが本論のきっかけのひとつである。

もうひとつは，現代日本語の敬語体系の運用をめぐり，さまざまな問題が生じ，その結果少なくない混乱が生じている昨今の状況にあって，上記の本質的な視点を見つめる探究の過程のなかで何か解決の糸口を見出すことができるのではないかと考えたからである。後述するが，敬語の混乱した状況を踏まえ，2007年に文化審議会の答申として「敬語の指針（答申）」が発表された。従来の敬語の３分類が５分類に増えたことが話題になった。しかし，なぜ分類項目を２つ増やすのか，あるいは，なぜ分類項目が２つ増えたのか，という説明は充分なものとは言い難い。となれば，その分類項目の増加という現代の敬語を表象が，敬語の本質の何かを物語るのではないか。言い換えれば，なぜ５分類なのかを明確に説明することが，真の意味で今日の敬語使用の混乱を解決してくれるのではないかと考えたことが本論のもうひとつのきっかけである。

2-2.　目　　的

背景としてあげた〈自己非自己構造〉の構築が本論の最終的な目的である。その目的のためには，敬語の現状をより深い部分で理解する必要がある。敬語は時代とともに変化してきたが，その変化のありようや今日の敬語のありようを考察すると，敬語の体系が向かう先が見えてくる。この敬語の変化や今日の構造を考察することによって，敬語という体系が，どのように〈自己非自己構造〉をなしているかの説明を試みたい。

3.　敬 語 の 現 状

3-1.　「５分類」の内訳

「敬語の指針」（以下「指針」）が提示した敬語の５分類は，従来の３分類と比較すると，謙譲語と丁寧語に下位分類が設定されることによって成立している。すなわち，従来「謙譲語」とされてきたものが「謙譲語Ⅰ」と「謙譲語Ⅱ」とに区別され，同じく「丁寧語」とされてきたものが「丁寧語」と「美化語」とに区分された。

謙譲語Ⅰは，「自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて，その向かう先の人物を立てて述べるもの。」[1] と定義され，従来の３分類で「謙譲語」とされてきたものとほぼ同じである。一方，この謙譲語から分化した「謙譲語Ⅱ」は，「自分側の行為・ものごとなどを，話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。」[2] としている。これは，話題になっている人物や物事ではなく，その話を聞いている相手に対して用いられる用法である。これは以前から謙譲語とは別に考えるべきだとする意見も多く，「丁重語」と称されることもある。また，丁寧語は，「話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。」としている。これは従来の「丁寧語」と同一である。「美化語」は，「ものごとを，美化して述べるもの。」[3] として別項を立てている。これは「謙譲語Ⅱ」と同様，以前から別に考えるべきだとされていたものである。

1）「敬語の指針（答申）」文化審議会国語分科会，2007，p 15
2）「敬語の指針（答申）」文化審議会国語分科会，2007，p 18
3）「敬語の指針（答申）」文化審議会国語分科会，2007，p 20

3-2.「相互尊重」と「自己表現」

「指針」をもっとも特徴付けるものとして，あるいは敬語に関する具体的な語彙を区別し整理するものとして，しばしば上記の５分類がクローズアップされるが，敬語の現状を把握する上でより重要なことは，この５分類を支える敬語に対する基本的な認識が「相互尊重」と「自己表現」であるとして明確に述べられている点である。この２点の意味するところについては後述するが，今日の敬語の本質に言及した画期的な部分である。

「相互尊重」は，「身分や役割の固定的な階層を基盤とした，かつての社会にあっては，敬語も，それに応じて固定的で絶対的な枠組みで用いられた。これに対して，現代社会は，基本的に平等な人格を互いに認め合う社会である」[4] ことを前提とし，さらに敬語というものを，「身分などに基づく旧来の固定的なものでなく，相互尊重に気持ちを基盤とした，その都度の人間関係に応じたものとして，現代社会においても当然大切にされなければならない」[5] と説明している。今と昔とでは敬語を使用する背景が異なるのだということを前提とし，現在は身分ではなく気持ちが敬語の基本だということを指摘している。

「自己表現」は，「具体的な言語表現に際して，相手や周囲の人との人間関係やその場の状況に対する自らの気持ちの在り方を踏まえて，その都度，主体的な選択や判断をして表現するということである」と説明している。これも，さきの「相互尊重」と同様，場面場面において，自分の気持ちのありようを表現するのが敬語の基本であるというのと同じである。

従来の敬語の定義から考えると，敬語に対し全く異なる認識の仕方であるということが理解できるだろう。

3-3.「立てる」ということ

さらに加えるなら，その象徴的ともいえるキーワードが「立てる」である。「指針」は，この語を「言葉の上で人物を高く位置付けて述べる」ことを表すものとして定義している。従来は当然「敬う」という語句が用いられてきたのであるが，これは正確な表現ではないという判断に基づく。「指針」では，別の箇所において「立てる」について，「その人物を心から敬って述べる場合」や「その状況でその人物を尊重する述べ方を選ぶ場合」，さらに「その人物に一定の距離を置いて述べようとする場合」などがあるとしたうえで，「いずれにしても，尊敬語を使う以上，その人物を言葉の上で高く位置付けて述べることになる。」としている。重要なのは，「言葉の上で」という部分である。敬語の使用は，相互尊重が基本だとしつつも，単に「心の問題」ではなく，あくまで「言葉の問題」であると明言したことは，今日の敬語状況を考えるとき，画期的だといっていい。

4.　敬 語 の 本 質

4-1.　謙譲語の非活性化と丁寧語の活性化

先の「3-1.　５分類の内訳」で，謙譲語Ⅱとされた項目は，「自分側の行為・ものごとなどを，話や文章の相手に対して丁重に述べるもの」である。自分側の行為やものごとを今話している相

4）「敬語の指針（答申）」文化審議会国語分科会，2007，p 6
5）「敬語の指針（答申）」文化審議会国語分科会，2007，p 6

手や想定する文章の相手に対して用いる敬語は，敬語全体の定義から考えて，もはや謙譲語ではなく，となれば，謙譲語Ⅱを新たに立てるまでもなく，これは従来の丁寧語の定義の範疇に入れるべきものである。すなわち謙譲語の一部が丁寧語化したということになる。これは裏を返せば，謙譲語というカテゴリが現代の敬語において非活性化していることを物語るものである。

また，丁寧語が分化して発生した美化語は，発話対象に対して直接的な働きかけをする語彙として丁寧語があったわけだが，直接的な働きかけをせず，発話主体内部で完結するかのような手法をとることによって，間接的に発話主体に働きかけるものと分析することができる。これは新たな手法である。丁寧語は，現代の敬語において，複雑化多様化するという変化を経ることによって活性化していることがわかる。

さらに，川岸克己2008「敬語における認識と構造の変化―「敬語の指針（答申）」をめぐって―」でも指摘した，謙譲語や丁寧語と同様の分化を尊敬語にも見出すことができる。学生が友人に対してであれば「田中先生，来てる？」と表現するところを，話題の人物（田中先生）の同僚の教師に対しては「田中先生，いらっしゃっていますか？」と「田中先生」への敬語レベルまで変化させるという例や，お店において店員が子連れの客に対して「（こちらのお子様は）ジュース，お飲みになりますか？」と，「飲む」という語の尊敬語の動作主体（子ども）にではなく，発話対象（聞き手），つまり親に対して敬語を用いるという例も[6]，許容度は高くないものの，ありうるという現状は，謙譲語や丁寧語の分化と同じように，従来の尊敬語の語彙を使用しながらも，発話主体（話し手）から発話対象（聞き手）への敬意表現となる，いわば「尊敬語Ⅱ」とでもいうべき用法が発生している。

となれば，現代の敬語は，発話主体から発話対象への語彙の体系へと変化しつつあるということができるだろう。

4-2.　主語制約

さらに現代敬語体系における発話主体の重要性に関して，興味深い論考がある。敬語における主語と発話主体の重要性を指摘した中右実2008「敬語と主観性（上）」である。この論文では，謙譲語を真に定義するのは目的語（動作対象）ではなく，主語（動作主体）であるという主張がなされている[7]。従来謙譲語は，動作対象つまり目的語を敬うという意味において定義されてきた。これを「目的語制約」とし，「敬意の対象人物が目的語名詞句に生じなければならない，という制約」と規定している。ちなみに，従来の尊敬語は，動作主体つまり主語を敬うという意味において定義されることから，尊敬語には「主語制約」があるとした。

しかし，目的語制約をもつとされる謙譲語を詳細に検討すると，謙譲語にはこの目的語制約に当てはまらない用例が多いことが指摘されている。たとえば，

・先生をお送りする。（対格）
・先生に事情を説明する。（与格）
・先生から学会の事情をお聞きする。（起点格）
・先生が入院されたとお伺いした。（引用格）

6）川岸克己「敬語における認識と構造の変化―「敬語の指針（答申）」をめぐって」『安田女子大学紀要』第36号，2008，p 8

7）中右　実「敬語と主観性（上）」『月刊言語』9月号，Vol. 37・No. 9，大修館書店，2008

など，目的語に含まれうる格以外のものが敬意の対象となりうるのである。

従来，謙譲語の定義としては，目的語制約が定義の第一義であった。主語制約は尊敬語にこそあるものであった。しかし，謙譲語にも，尊敬語とは逆の意味で主語制約が存在する。となると，尊敬語と謙譲語は，その主語が何であるかによって対立するものであって，主語と目的語で対立するものではないことが分かる。

4-3.　敬語は敬っていない

敬語は，古来よりその語彙においては変化があったものの，基本的な体系については大きな変化もなく今日に続いているかのように，表面的にはみえる。しかし，その実質は大きく変化している。「3-2.「相互尊重」と「自己表現」」でもすでに述べたように，かつては上下関係が絶対的かつ固定的な階層を基盤とした社会にあって，敬語も絶対的かつ固定的なものとして用いられた。つまり，個人というよりもその絶対的な身分社会の階層を尊敬するという意味において，誰かを敬うことが社会的に要請されていたということである。しかし，現代社会は，その都度の人間関係に応じて敬語が使用されるのが基本である。つまり，社会的な規範ではなく，あくまで個人の判断に敬語の使用が委ねられている。

しかも，平等社会において，個人が個人を気持ちの問題として，真の意味において「敬う」という状況はそうあるものではない。むしろ，別の気持ちの場合の方が圧倒的に多いと思われる。この問題には前述したが「指針」の中でも取り立てて触れられている。敬語は例えば以下の３つの状況で用いられるとしている。

・その人物を心から敬って述べる場合
・その状況でその人物を尊重する述べ方を選ぶ場合
・その人物に一定の距離を置いて述べようとする場合

「心から敬って」という部分は別としても，現代敬語は心からではなく言葉の上で人を敬うのである。これはもはや真の意味で敬っているとはいえない。

よって，「指針」では，特別なキーワードとして「立てる」を用いた。人を立てるというのは，その人および周囲，あるいは状況に配慮して，その場面において一時的に尊敬するという振る舞い方をするということである。敬っているか否かは全く問題ではない。今日の「敬語」はもはや「敬語」ではなく，いわば周囲にあるいは状況を慮る「配慮語」というべきものといっていい。ここで取り上げている体系を正確に理解運用するためには「敬」という語を用いるべきではないという方向で検討することも必要になってくるだろう。

5.　自己非自己構造としての敬語体系

5-1.　これまでの考察から

5-1-1.　肥大化する発話主体

「指針」が謙譲語Ⅱと美化語を新しい分類項目として設定したところに注目してみると，この両者は，敬語を使用する者，つまり発話主体の存在がシステム全体に大きな影響を与えるようになっていることを示すものであることが分かる。従来の謙譲語が敬語によって敬う主体を第三者であるとするのと同時に，その中に発話主体も含まれるというものであったが，謙譲語Ⅱは発話主体のみの用法を独立させた。これはとりもなおさず，発話主体の用法が増大したからである。

美化語は，従来の丁寧語が発話主体によって発話対象（聞き手）に対して向けた敬いの気持ちを，直接的には発話対象に向けず，発話主体のみで完結させるものとなっている。これも発話主体の自意識が敬語のひとつの文法カテゴリとして生まれたことを意味する。つまり，新たに増えた項目，すなわち現代日本語の敬語体系が肥大化させる用法の中心は，発話主体の存在であり，言い換えれば，敬語体系におけるモダリティ的要素の肥大であると言える。

5-1-2.　基軸としての発話主体

敬語体系が階層化する分節点は，「発話主体」の存在にある。となれば，従来は，謙譲語でいえば，発話主体と，発話表現中の登場人物とは別物と理解しても差し支えなかったが，発話主体の存在が敬語体系の中で肥大化した結果，発話主体が発話表現中に出現あるいは関与することが多くなった。したがって，敬語というシステムは，発話主体の認識のありようであるという，いわば当然のことを改めて認識し直し，敬語システムを再構築していく必要があるのではないか。すなわち，素材敬語と対者敬語とを明確に区分すること，である。「指針」の分類は，尊敬語や謙譲語の個別の語彙に引きずられてしまっているが，定義あるいは文法範疇を優先させ，そこに当てはまるものを分類していくという方が正確な体系認識だろう。そのためには，「発話主体」を基軸とした体系の再構築が必要である。

5-2.　敬語体系の構築

自己非自己構造は，事象を分節するにあたり，自己か非自己かを分節の基準とする。したがって，発話主体がまず分節しなければならないのは，敬語現象におけるもっとも大きな枠組みである素材敬語と対者敬語である。この２つの分節は文の構造が叙述内容（プロポジション）と心的態度（モダリティ）とから成立するのと相似である。しかも，文は叙述内容を心的態度が包含する。いうまでもなく叙述内容より心的態度の方が主観性の強い存在であるから，素材敬語は非自己的な存在であり，対者敬語は自己的な存在といえる。

したがって，まずは，敬語現象は，素材敬語と対者敬語とを自己非自己の分節として理解することができる。

敬語　→　素材敬語　＋　対者敬語
　　（非自己）　　（自　己）

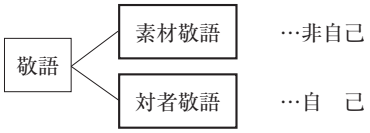

図１

文の構成要素と同じ視点から敬語の体系の分節は始まるわけだが，その敬語の直ぐ下の分類項目のうち，素材敬語は，従来の分類と同じく，「謙譲語」と「尊敬語」に分けることができるだろう。これも文の構成要素と同様の視点である。謙譲語・尊敬語・丁寧語が相互に承接するとき，その順序には厳然とした決まりがある。謙譲語の下に尊敬語が下接し，尊敬語の下に丁寧語が下接する，「謙譲語＋尊敬語＋丁寧語」という関係である。素材敬語の下位分類は，この相互承接

の規則に則っている。

素材敬語　→　謙譲語　＋　尊敬語
（非自己）　（自　己）

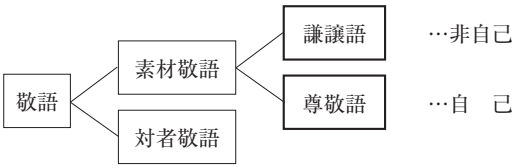

図２

対者敬語は，従来の「丁寧語」のほかに「美化語」が追加された。この分節は，発話主体が発話対象に対して「立てる」という行為とともに用いられるものであるが，その立て方が直接発話対象に対して作用する語と作用しない語とに分けられる。前者は従来の「丁寧語」である。後者は相手を立てる語彙を自らの表現に用いる「美化語」がこれにあたり，いわば，間接的に相手を立てる敬語表現である。自らの語彙に用いるわけであるから，対者敬語のなかでは素材敬語寄りとなる。したがって，以下のように図示できる。

対者敬語　→　美化語　＋　丁寧語
（非自己）　（自　己）

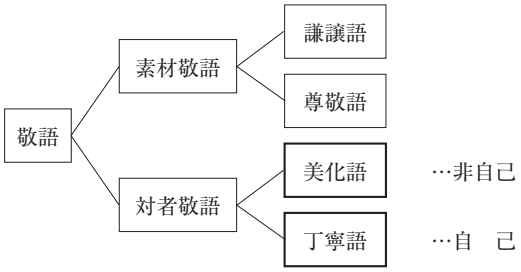

図３

ここまでで，敬語は自己非自己の分節によって，第２階層まで構造化されていることがわかる。さらに謙譲語と尊敬語はすでに本論で見てきたように分節される。しかも，その分節基準は，自己非自己のそれと同じである。

謙譲語は，すでに説明したように，謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱとに分けられる。その基準は，前者が発話主体の発話内容に関する認識の仕方であるのに対し，後者が発話主体の発話対象に対する態度の表明であった。いうまでもなく，前者は叙述内容よりとなり，後者は心的態度よりのものとなる。したがって，謙譲語は以下のように自己非自己の基準によって分節され，敬語の自己非自己構造に組み入れることができる。

謙譲語　→　謙譲語Ⅰ　＋　謙譲語Ⅱ
（非自己）　（自　己）

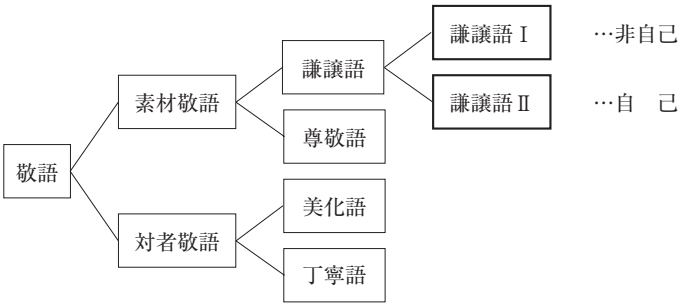

図 4

ここまでは「指針」に則った，すなわち現在の敬語に対する共通認識のもとで構築される敬語体系である。ここから先は，現代の敬語の本質を見極めた上で構造化を進めていくとどうなるかを提示するものである。

尊敬語も，謙譲語と同様に，さらなる下位分類がなされる。ただし，尊敬語に関しては謙譲語とは異なり，謙譲語が「指針」によっても分類されているのに対し，尊敬語は「指針」では明記されていない。しかし，謙譲語Ⅱの論理に従えば，尊敬語も分類することが可能であり，ゆくゆくはその必要性を検討しなければならなくなるものと考える。よって，ここでは，すでに説明したとおり，尊敬語を下位分類する。その結果は以下のようになろう。

尊敬語　→　尊敬語Ⅰ　＋　尊敬語Ⅱ
（非自己）　（自　己）

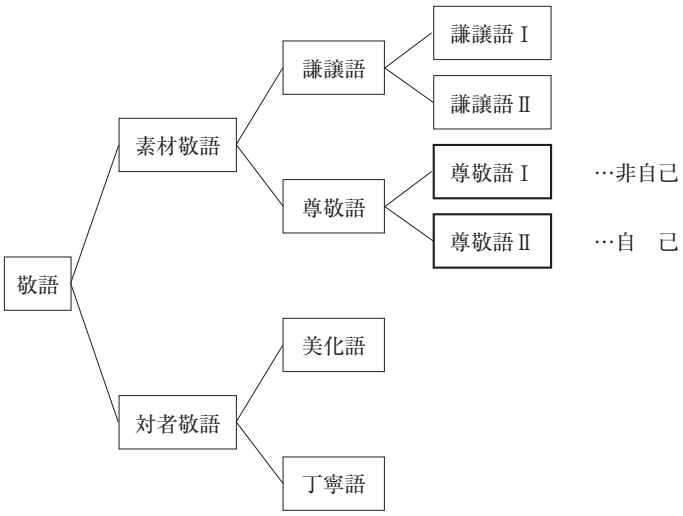

図 5

尊敬語Ⅰは，発話主体が発話内容に関して，その動作主体に対する認識のあり方を表現するが，尊敬語Ⅱは，発話主体が発話内容に関して言及しているかのようにみえて実際は発話対象に対する態度の表現である。よって，謙譲語と同じように，自らの行為に使用するか否かによって分節される。尊敬語Ⅰは非自己として，尊敬語Ⅱは自己として分類される。

この図５をみると，「指針」によって分類された「美化語」と「丁寧語」は，謙譲語や尊敬語のように第３階層を構成しないのかといった疑問が生まれてくる。そういった視点から両者を調べてみると，「指針」に美化語および丁寧語がさらなる分類が必要であることを示唆する記述を見出すことができる。「指針」によれば，丁寧語には「です」や「ます」のような一般的表現のほかに，より丁寧さの高い表現として「(で) ございます」をあげている[8)]。丁寧語は相手に対して働く敬語としているが，両者を比較すると，「です」や「ます」は相手の存在が希薄であり，後者はそれが濃厚である。つまり，一般的な丁寧語は，発話対象に対する直接的な作用を減少させ，より丁寧さの高い丁寧語は，発話対象に対する直接的な作用を強く保持することになる。これは丁寧語と美化語を区分した場合と同様に，間接的なものか直接的なものかの違いでもある。となると，謙譲語や尊敬語の区分に倣って，発話対象に対する働きかけの弱い，叙述内容よりの一般的な丁寧語を非自己とし，発話対象に対する働きかけの強い，心的態度よりの丁寧さの高い丁寧語を自己とすることができるだろう。またその名称は，これも謙譲語や尊敬語に倣って暫定

美化語　→　美化語Ⅰ　＋　美化語Ⅱ
　　（非自己）　　（自　己）
丁寧語　→　丁寧語Ⅰ　＋　丁寧語Ⅱ
　　（非自己）　　（自　己）

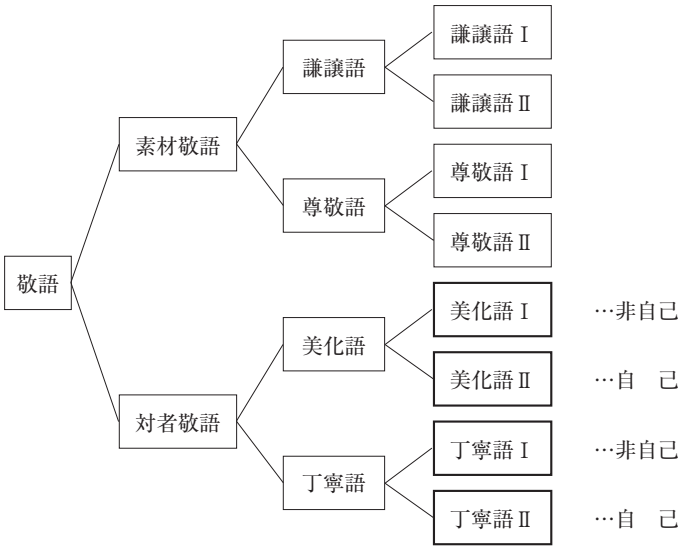

図６

8）「敬語の指針（答申）」文化審議会国語分科会，2007，p 20

的に「丁寧語Ⅰ」と「丁寧語Ⅱ」とに分けることができる。

さらにまた，「美化語」についても，「指針」にはさらなる下位分類が必要であることを示唆する記述がある。「お～」という表現を例に挙げ，「お酒は百薬の長なんだよ。」というときは，行為者や所有者を立てるものではない，すなわち発話対象への直接的な働きかけは弱くなるとするのに対し，「先生，お酒をお注ぎしましょう。」というときは，行為者や向かう先，相手などを立てる表現となり，発話対象への直接的な働きかけが強くなるとしている[9)]。これも，これまでそれぞれの敬語の分節が依拠してきた自己非自己の分節基準と同一である。発話対象に対する働きかけか，否か。発話対象に働きかけない美化語は非自己，発話対象に働きかける美化語は自己となる。名称も暫定的に「美化語Ⅰ」と「美化語Ⅱ」とすることができる。丁寧語と美化語をまとめて図にすると図６のようになる。

美化語と丁寧語の下位分類は，敬語の体系が深化していけば，自己非自己の構造を取っていることから，当然考えられる下位構造といえるだろう。

この図６で敬語の体系は第３階層まで構造化されたことになる。しかも，きわめて整合性を持った相似的な構造である。第１階層では，他者との関わりを意識することが自己の分節理由となった。第２階層でも同様に，他者との関わりを意識するか否か，であった。第３階層に至っては，語彙を自己のみに使用するか否かという，より明確な他者との関わりがその分節の基準となった。

6.　ま　と　め

敬語の自己非自己構造を構造化させているのは，圧倒的に「他者」の存在である。しかも，その他者は今ここに存在する他者である。敬語という体系の存在意義を考えるとき，それは何者かに対する配慮の体系であり，となれば，我々が言葉を発するときに配慮する第一は，その言葉を受け取る者に他ならない。今後もこの傾向は強くなっていくだろう。謙譲語や尊敬語，さらには美化語，丁寧語にもその兆候はすでに顕著である。

語の集まりが相互に組織化され，体系化されていくとき，その力は，ランダムに組み上げられていくのではなく，他者を意識する自己の存在であり，それもまた自己非自己理論の分節基準となる。敬語の体系もまた自己非自己の分節基準のもとで階層化された構造をなすことがわかる。

参　考　文　献

1.　「敬語の指針（答申）」文化審議会国語分科会，2007
2.　辻村俊樹『敬語論考』明治書院，1992
3.　森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明『講座日本語学９敬語史』明治書院，1981
4.　大石初太郎『現代敬語研究』筑摩書房，1983
5.　辻村俊樹「日本語の敬語の構造と特色」『岩波講座日本語４敬語』岩波書店，1977
6.　鈴木一彦・林巨樹編集『研究資料日本文法９敬語法編』明治書院，1984
7.　北原保雄『日本語助動詞の研究』大修館書店，1981
8.　中右　実「敬語と主観性（上）」『月刊言語』９月号，Vol. 37・No. 9，大修館書店，2008
9.　仁田義雄『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房，1995
10.　時枝誠記『国語学原論』岩波書店，1941

9）「敬語の指針（答申）」文化審議会国語分科会，2007，p 21

11. 渡辺　実『国語構文論』塙書房，1977
12. 渡辺　実『日本語概説』岩波書店，1996
13. 梶原しげる『すべらない敬語』新潮新書，2008
14. 川岸克己「敬語における認識と構造の変化――「敬語の指針（答申）」をめぐって」『安田女子大学紀要』第36号，2008
15. 高安秀樹『フラクタル』朝倉書店，1986
16. 高安秀樹『フラクタル科学』朝倉書店，1987
17. ジョージ・レイコフ（George Lakoff），池上嘉彦・河上誓作他訳『認知意味論』（“Women, Fire, and Dangerous Things”）紀伊國屋書店，1993（1987）
18. GEORGE LAKOFF and MARK JOHNSON “METAPHORS We Live By” The University of Chicago Press, 1987
19. LEONARD TALMY “TOWARDS A COGNITIVE SEMANTICS” The MIT Press, 2000

〔2008.　9．29　受理〕